

●「八代地人」(熊本県) 四月号(通巻2号)山口碧主宰)には山口碧氏による「創作を志す者よ来たれ」という巻頭言があって、情熱がほとばしっている。

「日本全国に作家を志す無名人々はいったいのくらいいるのだらう。そしてその人々はその望みを達成すべくいかなる努力を重ねているのだらう。彼らの行く手には気の遠くなるような灰色の世界が広がっている。

ほとんどの才能がありうまく時代の流行に乗りその上よほどの好運に恵まれた者だけが、○○文学賞なるものをもたせて金と名声を得る。しかしその作品が『文学』の名に値するかどうかは全く別物であって近頃はますます『○○賞』と文学との相関関係は薄れてしまった。それが現代だと言えどもそれが、金にたならなければ文学にあらずという風潮に、当事者たる作家自身が身を投じてそれに気がつかないのはどうしたことであらうか。

文学を志す者はこのことに早く気づかなければならない。そして、『○○賞』の呪縛を断ち切って腹の底から出て来る真実の言葉で作品を書かなければならぬ。そこからしかし新しい日本の文学は生れて来ないだろう。

正論である。この姿勢の上から、きつと力のある作品が生まれてくると思う。雑誌を続けることの困難を乗り越えて、すばらしい真の新人作家を育てていただきたい。

●「文学街」(東京/森啓夫主宰) 212号掲載の原石寛氏「おさよの死(二)」は岡場所の女(四)のシリーズの副題があるが、江戸時代の遊女と芸の世界を一貫して書き続けているこの筆者には、独特の感性と執念があつて、一つの世界を造形し得ている。体を売る女たちにも、いやむしろそれだからこそ深い精神の世界があり、その気質の魅力と悲哀とを、一方では突

き放しながら遠くからやさしく包み込むように描くこの筆致は、何か並々ならぬ深い因縁に結ばれているように見える。現代において、このように遊女たちを描ける作家はいないだろう。貴重な存在である。ここには一代では成しえない、遊女たちと筆者の血筋との深い関わりが横たわっていることが垣間見える。結核に倒れたり、性病に冒されたこと、無理心中を強いられる、自殺したり、胃を吐く苦しみの中から人間の歌を奏でていた過酷な運命の下に生きる女性たちをこのように生き生きと現代に蘇らせることのできる作家は原石氏以外にはいないだろう。犠牲になっていった女性たちの悲惨と薄幸の屍の累々たる集積の上に、その霊を汲み取り慰撫し、鎮魂するために原石氏の小説群は成立しているように見える。淀みない軽快な筆致は物語性に富み、軽快な江戸音楽のような展開力に満ちている。この世界に生きる女性の魂の音が確かに聞こえてくる。彼女たちは生きている。こういう作家に山本周五郎賞のようなものが与えられていいと思う。

●「文学街」は52Pと薄いが、多彩で書き手も多い。雑誌に活力がある。

●「北斗」(名古屋/竹中忍編集発行)は四月号で512号というとてもない歴史を持つ同人誌。この継続力にはまず脱帽。おそらく半世紀の歴史があるはずである。これに連載されている松村豊資氏の「新選組春秋」は七回目を数えるが、ひじょうによく調べてあつて、私が読んだ中では「新選組」関連のもので最も詳しく書かれているように見える。うる憶えだが、子母沢寛の新選組よりも詳しく気がする。考証の詳しさは特筆すべきところがあるが、逆に人物の生き生きとした動きややまや浮かびにくい面がある。これは一方を立てれば自然に一方が立たなくなる道理ではあるが、できれば主人公やその周辺、あるいは群像としてもいいが、ダイナミックに動かす注意をしていただければもつと生き生きとしたものになるだろう。いずれ本になるものと想われるが、そのときどういうふう

している。これを新しい角度から摘出し、現代の我々と繋げて見せるところに評論家の手腕がある。

673号の豊田一郎氏「夢幻泡影」は力作で題材もいいが、小説としてのテーマが絞られていない。自伝的な、記録的な小説が、境界があいまいになってしまっている。これを小説にするには、世界と対峙する意志が必要だろう。歴史と時代の荒波を虚偽や夢として切り裂く強烈な意志が小説世界を作っていくはずである。

●「金沢文学」(金沢市)はポリリウム満点。これについて、また「日曜作家」(北九州市)、「構想」(長野県東御市)については、次号でのべさせていただきます。

(作家集団「塊」/五十嵐勉)

●寄贈誌・寄贈本御礼

貴重な誌・御本をお贈り下さりまして、まことにありがとうございます。心からお礼申し上げます。今後どうか「文芸思潮」のこの欄にお贈り下さいますようお願い申し上げます。

- 「八代地人」(熊本県八代市) 2号・3号・4号
- 「金沢文学」(金沢市) 20号
- 「文学街」(東京都) 212号・213号・214号
- 「塊」(千葉市) 23号
- 「北斗」(名古屋) 51号・517号
- 「日通文学」(673号) 682号・683号
- 「構想」(長野県東御市) 37号
- 「日曜作家」(北九州市) 8号
- 「凱」(東京都) 26号
- 「カブリチオ」(東京都) 16号

(2005.3.6) 6.6

本

- 「夜光の時計」八寛正大(新読書社)
- アジアの現代文芸マレーシア「山の麓の老人」(大同生命国際文化基金)
- 「あなたと二人旅」太田悠(新風社)
- 詩集「星を狩る夜の道」池田康(北溟社)
- 詩集「かたみの音」藤森重紀(龍工房)
- 詩集「雪行列」藤森重紀(龍工房)
- 「子規の四季」陽羅義光(かりばね書房)

●同人雑誌・本をお送り下さい。  
同人雑誌活動の振興奨励として、同人雑誌の中から優れた作品は、「文芸思潮」でとりあげさせていただきます。優秀作品として転載をお願いする場合もあります。どうぞよろしく御寄贈のほどをお願い申し上げます。宛先は「文芸思潮」同人雑誌・本係までお願いします。

を入れるか、楽しみなどところである。期待される。

●「塊」五月号23号(千葉県/主宰遠野明子)は充実した誌で、作品もそれぞれが入っている。遠野明子氏の「月の光」はいい点を突いている。

「……月光は広く及んでいく。下界は静かな光を被つて、電線や樹木の影がペールを透かして見るように柔らかであった。何だか死の国の光みたいだな、と比奈子は思う。死は比奈子にとって、なぜか静かな太古の水のイメージがある。孤独が透き通る、と思うのかしら? 月の光は見たことのないその深い水に似ている……と感ぜられてならないのである」

それは結末の描写に呼応する。

「海に映る月はどんなだろう。漣立つ水面が人知れず沖で明るむのが見える気がした。静かな美しい不安が見える。沖へ沖へ、ゆつくり泳いで行く自分が見える。小谷さんも、女医も、どこかを泳いでいるのだ。あるいは無数の女たちが、月光を浴びながら、どこかそれぞれに「今」のひと掻きを漕ぎながら、沖へ沖へと泳いでいるのかも知れない……」

いいところまで行っているが、もう一つ結晶力が弱いのは、随想的な組み立てに終っているせいだろう。もつと決定的な事件や行動、運命と結び付けてはじめてインパクトを持った小説造形となる。「月の光」というタイトルも弱く、言葉の根の食い込む力に欠ける。

銀華文学賞  
スポンサー募集

銀華文学賞を支援して下さるスポンサーを募集しています。賞金・記念品などご提供していただける方がいらっしゃいましたらご連絡ください。1口1万円御支援いただきましたら幸いです。

アシア文化社五十嵐勉までご連絡ください。  
TEL&FAX 03(5706)7848  
郵便振替00140-9-770331名義アシア文化社

西村聡彦さん、柏文字さん、下山良行さんは銀華文学賞スポンサーになっていただきました。ありがとうございます。

広告募集

「文芸思潮」掲載の広告を募集します。どうぞご用命ください。  
「文芸思潮」ウェブ1/6 広告4000円から  
本号1/4 広告5000円から  
ご相談に応じますので、お気軽にお問合せください。  
版下は極力お客様のほうでお作り下さいますようお願い申し上げます。  
TEL&FAX 03(5706)7848 アシア文化社

# 同人雑誌評

彼が江戸に出てきたのは、物見遊山以上に、重要な用件が控えていたからである。

定之輔は江戸へ行く決意を固めてから、首席家老、中原守重の屋敷を訪れた。  
「隠居暮らしは如何じゃ?」  
顔を見るなり、守重は云った。  
「はっ、恐れ入ります。樂をいたしております」  
「羨ましいのう。ところで、何用じゃ?」  
「お願いがあつて参りました」

定之輔は長年の間、心にわだかまっていた久坂兵部の話をした。彼の帰参を願ひ出たのである。「自業自得とはいへ、彼の役儀御放赦は私と関係のあること故、ずつと気に掛かっておりました。二十有余年が過ぎ、彼の余命も限られておりましたら、このあたりで帰参をかなえてやっていたければと存じます。私の老後に残された、唯ひとつの気掛かりにございます」  
「定之輔らしいのう。兵部は良き同僚を持ったものじゃ。考えておこう。後日、沙汰いたす」  
「有難うございます。よろしく願ひいたします」

暫らくして、帰参を差し許すとの沙汰が出た。定之輔はその沙汰を受け、江戸に向けて出立したのである。  
「本当でござるか?」  
その話をする、兵部は定之輔の手を押し頂き、大きく見開いた目から、ぼろぼろと涙を流した。  
「今日は何という良き日じゃ。妻が生きておれば喜んでであろうに……」  
そう云つて、兵部はまた、涙を流した。

定之輔も思わず涙ぐんだ。長い間、心の片隅にわだかまっていた黒い霧が晴れ、陽射しが胸いっぱいになり広がっていくようなすがすがしさを覚えた。  
「めでたいことじゃ。これで、拙者の肩の荷も下りた気がいたす。祝杯を上げるといたそう。どこかよき店はござらぬか?」  
吾妻橋近くの料亭で、彼らは祝杯を上げた。酔いが回つて来た時、兵部が唐突に云つた。  
「ところで、あの時の貴殿の太刀さばきは見事でございます」  
「見ておられたのか?」  
一瞬、定之輔の顔が蒼ざめた。  
「村人たちは貴殿の意志が固いことを知って、角衛門に詰め寄つたのだ。毎年、夫役に駆り立てられてはたまらぬと……そこで、村役人は密議をこらし、貴殿を亡き者にしようとしてたのでござる。彼らがそこまでするとは思わなかつた。たまたま、あの夜、角衛門の屋敷に立ち寄り、中の人からそのことを聞いて、拙者は驚き、激怒した。しかし、知るのが遅すぎた。刺客はすでに出発していたのでござる。拙者は刺客を引きとめようと必死に走つた。場合によっては、貴殿に助太刀する積りでござつた。間に合わなかつたが、貴殿の腕の確かさは拝見させて頂いた」  
「左様でござつたか……」  
定之輔は酒盃になみなみと酒を注いだ。そうして、一気に飲み干した。その時、彼は防砂林の松の梢を蕭々と吹き過ぎる風の音を聞いた。

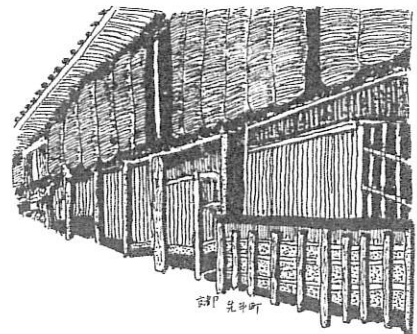
である。

●「日曜作家」復刊8号(北九州市)は装丁も美しく、内容もずつしりした手応えがある。センスもいい。息の長い、腰のすわつた作家が揃つている。「スエ女覚書4・帰郷」深田俊祐は落ち着いた筆致で、女性一代記を通して、一つの歴史に肉薄している。漢詩をうまく使いながら、佳品に仕立てている手腕は力量を感じる。

山口正昭「アスファルト・ジャングル」は素材がいい。アメリカの都市生活をこのように描いているのは初めてのよう思う。この小説が魅力的なのは、単に新鮮であるだけでなく、アメリカの都市という舞台が動いていくことによって、逆に日本の都市生活が照射され、浮かび上がってくるからである。まだ続くというのだが、どういう展開になつていくのか、楽しみな作品である。

●「季刊午前」33号(福岡市)も瀟洒なつくりで、あか抜けたデザインは、読書欲をそそる。手触りがいい。挿絵も嬉げ込んで、みごと。書き手も力のある作家が並んでいる。奥付のページを見るとかなりの数の同人メンバー。レベルの高い誌である。どれもみな高い水準で、「萩原朔太郎の吃水」宮本一宏、「長崎、サンタ丸やルイス・グ・アルメイダ」⑨加茂宗人、「2046」及びウオン・カーウアイの芸術について「大江高弘など、読み応えもある。山本省吾「堆積する文化のこと」はエッセイ+紀行文の体裁だが、文化論まで鋭く深めていて、それが構えずにさりとした味わいで読ませるのが、相当な力量であることを

インターネット文芸新人賞  
**緑の手紙**  
五十嵐勉  
カンボジア難民ボ・シティはなぜ発狂したか。フィリピン戦線の生き残りの父と戦跡を訪ね、カンボジア難民の告白と重ねながら平和日本の矛盾を告発する問題作  
アジア文化社 1700円



イラスト/下山良行

●「木曜日」21号(奥付に発行主体はあるものの、住所・連絡先がない。おそらく東京?)は華麗なイラストや題字で、なにやら世紀末王朝風。内容も視点が変わつていておもしろい。趣味の強い女性たちがひしめいているような感じ。粒がそろつていて、はずれがない。女性の感性が充滿して、女性の内面を知るには宝の山のように見える。「きらりの瞳とからっぽの瞳」菅原英理子とか、「笑われるのならば」没法子とか、「そいぎんた」桑島まさきとか、タイトルも「飛んでる」感じで、それだけで興味をそそられる。こういう誌の合評会とはどんな合評会になるのか、ちよつとおそろしい感じもするが……。  
奥付にはやはり住所と連絡先を表現者の責任として入れておいたほうがいい。秘密っぽい雰囲気も雑誌の個性ではあるもの……。

●「法羅」53号(大阪府枚方市)はほとんど200Pの大ボリューム。時代小説あり、遍路の旅もありと、楽しめる。随筆が多いのも特徴で、また随筆には「星屑ひろい」など光をはなつものが多い。つもある。巻末にマスコミその他から「作品評」を丹念に拾っているのも好感が持てる。

ている。しばらくして陽子も抜け出して来た。東の空に向かつて、大きく伸びをして、一平の日光浴ベンチに密着して倒れ込んだ。同じタオルケット姿だ。

「一平ちゃん、よう眠ってたなあ」とにじり寄りながら、  
「わては、なんだかよう寝られんかったわ!」  
と、また一つ大あくびをするのだった。  
「いつも、寝付くまでは、ビビーをはべらしていたんで、調子が狂うたんかいなあ!」  
と、胸の内を明かした。一平もそうだと思っていた。

「それもあって、また、考えさせられたんや!」  
強がっている、ビビーが悲しいようじゃあ、わても年を感じてしまったわ。もっと、大事にしたらなあかんと思うたんや!」  
と、またしるも弱音を漏らすのだった。  
「そしてなあ、一平ちゃんとかくつついて寝てたやろ! またこれも、いろいろ考えて目が冴えてきたんや。同床異夢、ちゆうことを思い出してなあ。男女二人が同じ床に入ってたながら、違う夢を見るちゆう意味やろ。そんな不真面目な気持ちほだめ! という戒めに使われる言葉やと思うてん。それが、最近になって、尼さんにはらった『女流作家』の講話が女性週刊誌に出て、そのことを説明してん」  
「ほう、どないに言ううとったん?」と一平が一息入れると、続いて  
「それはなあ。年いったら、夫婦というたかて、一緒に寝ながらも、別の異性のことを思い浮かべるのは当たり前や! せやから、老夫婦になっ

●「じゅん文学」45号(愛知県名古屋市)の「こがでなくした左の世界」はおもしろい。失った眼球の空洞の世界から見える感覚が、乾いていていい。このトーンには新鮮な感覚がある。特に前半はプラスチックのような現代の感覚が主人公の生活と心の空洞とうまく共鳴し合って、現代の空虚感に繋がっていく予感がある。マユミやサラなどの人形や架空の恋人とのやりとりも面白い。ただ、後半「ママ」の家に行つてのドラマはやや閉塞空間が勝ち過ぎ空虚な仕立てに閉じられてしまっている。失った眼球の世界が現代とどのように繋がり、社会をどのように見、行動していくのか、その重要な接点が生かされなくなってしまう。最後まで「なくした左の世界」を保持し、それをドラマの基軸にし得た上で何かを抉り取る事ができたら、もっと問題性も深まり、現代に十分通用する作品になっていたであろう。そうは言っても、昨今の同人誌では出色の作品で、ひじょうに可能性を感じる。この設定自体に才能がある。「群像」などでも、これくらいのものが大手を振って掲載されている。それよりもむしろ清新な感じもする。

この設定であとシリーズで何作も書けそうだ。「一方の眼を失った」という小説上の武器をどこまでうまく使用できるかが、今後の力量を問われる焦点になるだろう。古澤崇氏は、もっと現代の問題をしっかりと見すえ、それにもどように肉薄していくのか、その姿勢と努力が今後問われることになるだろう。いずれにしても、この作品は多くの方に読んでほしいものがある。同人雑誌優秀作に推薦したい。

「じゅん文学」は他にも力量の感じられる作品が多く、加島憲氏の「鶴(ひよどり)」も、妻の不倫を疑う夫の視線がうまく出ている。佐藤慎祐氏「脳内時限爆弾」とか、神門ベアシ氏「リストカット・ベイビーズ」とか、まだ足が地についでいないひ弱さは感じられるもの、おもしろい発想の若々しい小説作品が見

たら、お互いに、角突き合わさんと、空想するくらい自由は認め合わにゃいかん、という話やつた」  
「そうか!? その通りやけど、わてはこのように解釈してんのや!」と、一平が口出ししたくなくなつて結論を急いだ。

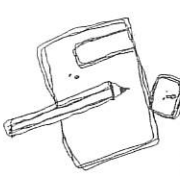
「同床の夫婦が、ただ思うだけなら、あの孫悟空がお釈迦様の掌の上で、いちびつてるようなもんで、なんの罪も実害もないんや! という解釈や。やつぱり、同じこと考えてたんやねえ!」  
陽子の口から聞くことで、ますます近親感を覚える一平だった。

その時である。東の水平線が一段と明るくなつて太陽が頭を覗か始めた。  
荘厳な場面に遭遇し、二人は言葉も失ったまま見とれていた。全てが顔を出したところで、陽子が口を開いた。  
「あれ見てみ! こつつう大きいんやねえ。昼間の太陽しか見えないさかい、たまげたわ。それに、どや、真つ赤な口で小さい島を次々と呑み込んでいるみたいやないか!」  
と、太つ腹の陽子らしい感想だ。  
「わいも、海での日の出は思い出せんわ。なんか、手を合わせたくなるなあ」と、思わず合掌しながら一平は、続けて、  
「わい、太陽が昇る前からずつと東の空を眺めていてん。このひとときは、老いらく園」の一場面やと思わへんか? 楽園ちゆうても、この世では、四、六時中、未来永劫に続く場所なんて、あれへんと思うんや。今のうちに、当たり前の生活の中で時々キラツ」と光るかけらを拾い集めん

られる。若い書き手が集まっているのは頼もしい。これは主宰者の戸田鎮子氏の才量と努力によるところが大きい。彼らの才能をどう育てていくか、期待したい。

●「文学街」218号、佐藤章二氏の「喩法」は、若い男女の間の恋愛感情の機微を描いた好短編。学生生活もよく描けている。ただ、広島ということ、主人公の顔のケロイドは必要だったか——これは小説のテーマにあまり響いてこない。もしこれを入れたら、もっと奥行きが深い心理模様が展開したであろう。しかし手堅い筆力は修練の成熟を感じさせる。  
「文学街」219号、小南武明氏「幻蝶」は悪くないが、長過ぎる。この素材がこのテーマだったら、半分の長さでいい。もつと文章を削つて、緊張感を持たせて進めるべきだろう。  
原石寛氏「太郎さん」は好掌篇。原石氏の文章は平明ななかに、庶民の氣息を伝えて、深い味がある。218号の「秘伝」もよかった。原石氏の文章は読者の期待を裏切ることはない。もつとたくさんの人に読まれている。大衆性、普遍性を持っている。  
●「空とぶ鯨」6号も力量のある書き手が多い。これについてはページがなくなつてしまったので、次号に譲りたいが、274Pというボリュームだけでも、手応えのある誌である。

●次号から同人誌評は作家集団「塊」メンバーの高雅博も加わることになった。同人雑誌賞も設けたことだし、いっそう同人誌評は充実させていきたい。より多くの同人雑誌が寄せられることを期待している。  
(作家集団「塊」五十嵐勉)



といかんのやないか、と思うねん。せやからこそ、こやつて旅をするように探し続けなあかんと思うたんや。あんな、どう思う」と陽子に話を振つた。

「不思議やねえ。わても気がついたんやけど、身の置き場を変えてみると、自分のことでもよう解らんやなああと、しみじみ思うたんや。こうして思い切つて、自分の居場所を変えてみて初めて解る気がしたわ」と、女にしては割り切りの早い、確かな手応えを得ているようで、感心させられた。  
「人にとつて、生きるということは旅することみたいやと思うねん。場所はどこでもかまへん。これからも、いろいろ旅してみいへんか?」  
と、自分の想いを披露する一平だった。そして、  
「さあ、シャワー浴びて朝飯にしようや!」  
と、ワザと声高の一言で席を立った。部屋に戻り着替へた後、少し早めであったが別棟のレストランに向かった。楽しみな海鮮料理を待つ間、二人の心境を映し出したような、明るい東の空を無言のまま眺めているだけで、互いの心に通い合うものを実感するのだった。

まだ、二日間ゆつくりできる。特に、「ジャウゆきさん」を自認する陽子にとつて、「老いらく園」を探す旅は、幸いにも、入り口への手応えを感じたことで希望の灯りを見た想いだつた。残る二日間だけでも、また新しい発見の予感に心を弾ませていた。同時に、この旅には、終わりがこないのだということも、しっかりと覚悟する二人だつた。

●「八十年目の前とうしろ」小倉節子/近代文芸社  
●「パイオリンの眠る昼下がり」小蔵涼子/トレビ文庫  
●詩集「本棚」森香太郎/ふらんす堂  
●短編集「富士の見える部屋で」松原暢夫/松原出版  
●「チエーホフの肖像」仲間秀典/松本大学出版会  
●詩集「戦後六十年前の遺された絵画を詩う」牧野徑太郎/龍書房  
●「鉄と老人」杉本利男/彩流社  
●「遙かなる日の女神たち」豊田一郎/のべる出版企画

●「愛別離苦」小栗竹子/徑書房  
●「戦後の生を紡ぐ」小栗竹子/一葉社  
●「あかいはな」2号/サロン・ド・紅香  
●「八代地人」10号・11号・12号・13号/山口碧  
●「文学街」218号・219号/文学街社  
●「新・現代詩」19号/知加書房  
●「イマジネーション」3号/山梨文芸家協会  
●「じゅん文学」45号・46号/じゅん文学の会  
●「空とぶ鯨」6号/文芸同人空とぶ鯨

同人雑誌の振興奨励として、同人雑誌に発表された優れた作品は、「文芸思潮」にてとりあげさせていただきます。優秀作品として転載をお願いする場合もあります。どうぞよろしく御寄贈のほど(二冊)をお願いします。宛先は「文芸思潮」同人雑誌係です。お待ちしております。

は向けたくないのです」と言うようになる。「私たちのクラスで私ほど予習をしていない人はいないでしょう。宿題さえやっていないのですから。自慢にはなりませんね。でも授業中は時間がもったいないからしつかりやっています。時々眠たくてたまらなくなりますが。そんな時、窓の外を見て、なぜあんなにギラギラ光るのだろうかという感じがします。なにしろそんな時は前の晩、いつもの欲張りで六時間位しか寝ていないんです。漢文や古典、時には数学や地学までも、これがいったい役に立つのだろうかと思ってしまうのです。」

「こういう変貌はまさに青春そのものである。しかし、頑張り屋の彼女はまだ学業を『投げ出し』てはいない。「二年では」というのは三年になつたらまた受験勉強に集中するつもりでいたのだ。それが、二年の秋ごろから、『鉄の雨車』や『青いガラスの靴』や『怪物』などを見るようになる。」

私は見た

私は、身を横たえる度に見なければいけないのです。しらじらしい夜気は冷淡で、少しもそれを避けてはくれないのです。それは貪欲な顔をして、避けられぬ淀んだ目をむけます。酒寝りの息を吐く、黒の混濁です。ごろごろと滴つた声で、早く来いよ」と私を

ればならない。彼女の自死がその言葉のせいではなかったとしても、生きていてほしかった。生き延びてほしかった。

しかし、気休めにすぎないが、今日見てきた武甲山の無惨な姿を思うと、それを見ないで済んだことが幸せだったのかもれない、とも思う。「十八世紹の心しか持てない奴だっている」とノットに落書きした彼女は、ゲーテの時代のドイツとは比較にならない日本の息苦しい時代の空気を感じていたのだろう。

その息苦しさを「軽く受け流し」して生きるには、あまりにも純粋で、生真面目で、彼女の言葉を借りれば「神経が淋し過ぎた」のだ。

婦りの車中を、そんなことを私は語るともなく健司さんに語り、健司さんも遠い日の妹への思いを語り、互いになつてきた。

「弦」 78号

「三角関係」 木戸順子

まず、題名が真切られるのが良い。ここでの三角関係は電車に乗り合わせた自分と、小学生と、女であり、下りてからは、自分と、乗り合わせた女と、電車または、これから会いに行く友達との間の関係である。短編だが、もう一つの三角、自分と自分の病氣（小説では進行性の方が良いか）とその他全部の世界の関係が言外にでも表現できれば完成したのではないだろうか。「味噌の味」 山森英夫

長年続いた読書サークルの解散と別のサークルができるまでの人間関係が旨く描かれている。ただ、全体

からかいます

私は、軽く受け流そうと、努めるのですがどうにもしようのない程身が重くなる。見る間に表情が崩れてしまうのです。もう、終わりです。全てが、もう終わりになるのです。

「私は見た」という詩があるが、彼女はそれらのものを確かにその目で見たのだ。とり憑かれたように、避けようとしても見なければならなかった。それは幻覚だったかもしれない。しかし、見たものの現実感に幻覚が終わっても消えはしなかった。

「終わりです/全てが、もう終わりになるのです」と書くことでそれはいよいよ確かなものになっていったのだろう。

そして頑張り屋の彼女が学業やその他に手を抜くようになったとき、それは罪となり、罰として降りかかった。「私は数多くの罪を犯しました」と遺書に言っているのはそういうことだろう。「目もて美を觀たる者は、既に死の手に落ちたるなれば、もはやこの世の業に適はず」という詩人ブラテンのこのことばを知っていたかどうかは分からないが、一般社会人として生活するために、先ずは進学をめざして努力する、という気にはどうしてもなれない。かといって、いい加減な生き方を自分に許すにはあまりにもまじめで純粋すぎた。

「私がこれから生きてゆくには、あまりに他の人に迷惑がかかります。社会の機構の全てが障害にあと5%殺れたらと思う。」

文芸中部 70号

「伝説の人」 福島奈津子

主人公は知的障害のある娘と、行方不明になっている老婆が住む神社と一緒に暮らし始める。非日常の世界なのだが、どうも危うい。物語は日常と非日常の狭間で進められ、結局その狭間で終わってしまう。普通は、日常に戻るか、又は、非日常のなかで、物語が荒唐無稽でも進行するかなのだが、中途のままで終わってしまう。ただ、この作者は書かなければならぬものを持つていた感じがする。この同人誌の最後にガルス・マルケスに関する文章が寄せられているが、彼や日本では目取間俊が持つ文庫、魔術的リアリズムというようなものを研究したらどうだろうか。

日通文学 12月 第89号

「猫族に近い女流作家」 68号

真杉静江と中山義秀 川端要壽 両者とも良く知らない作家だが、丹念な研究で実像が浮かび上がる感じがする。その生き方は興味深い。努力である。

「また現う日ま」 86号

「高校時代、演劇を通して知り合った仲間のおひとり」 稲葉有

高校時代、演劇を通して知り合った仲間のおひとりが入院し、それを皆で見舞いにくくという話である。年齢が70を過ぎており、それぞれの人生が語られるが、年齢からくる、尿漏れと、安全ショーツの話がとてモリアルであり、それらの冗談のような会話と、友の死の対比が際立っている。

となります」という言葉は思い過ごしではなかったろう。

自分が見いだした美の世界に生きることが、絶対に不可能だと知っていて絶対に諦めない心と心を決めれば、もはや時間を停止して現在にとどまる以外にはない。それが『パスの中』である。本当はどんなに他の人に迷惑がかかっても自分らしく生きてゆけば良かったのだが、それが出来なかった。「遺書」の中で、「私をも巻き込んで」弱さを深く知れば知るほど……と言っているその『弱さ』とはそういうことではなかったろうか。

風に吹かれる細い葎の葉が、吹き千切られそうになりながらも懸命に頑張っているように、弱い人間が弱いながらに自分の生き方を貫き通そうとしている姿を、私の上に重ねて見ていたはずなのだ。その私は彼女の幻想に過ぎないが、たとえ幻想であってもそういう生き方のあることを信じて、生き抜く道を選んでほしかった。ゲーテが作品の中で若きヴェルテルを自殺させて自分は蘇ったように、彼女も詩の中で自分を地下深く埋葬して、生き延びてほしかった。

しかし、十八世紀との時代の違いか、ドイツと日本との社会の違いのせいも、それが出来ない自分を、彼女は「先生、結局私は主人公ではないのですね」と言っていることである。私自身の記憶にはないのだが、いつか授業中に引用したら「死せよよ成れよ、しからずんば汝は暗き地上の孤客に過ぎじ」というゲーテの言葉を、死を前にして思い浮かべていたのだ。そして「たぶん」、それを口にしたときの私の顔をも、自分には出来ないことを偉そうに口にした自分を恥じな

相模文芸 第11号

「追慕」 田中洋子

戦前、中学校4年に赴任された教師の思い出を描いたエッセイである。短い時間であるが強烈な印象を作者に与えたようで、それが切々と語られている。

ベルク100号

これは「山の文芸誌」である。「回想・利根川源流 廻行」八田義一等の、紀行文を興味深く読んだ。山登りというのは、他に誰もいない場所に行き、それも小人数で、危険をともなうこともあるということらしい。つまり、密室で、極限状態の中で小人数の登場人物の間で色々な事が起こりうる。劇としての要素をすべて持っていることになる。人間性が現れる場所ということで、いくらかでも物語が生まれそうだが、期待したい。この号にも小説を発表されているが、小林理樹氏から「秋の匂い」という単行本が送られてきた。表題作は、作者にとっては切実な題材なのか、焦点がちよつと拡散気味な感じはするがなかなかの作品である。ただ、他の作品との差が大きすぎる。

北斗521号、523号、524号

「サンカの子」 大西亮

新任の教師がクラスに現れないサンカの子供を学校に登校させるまでを描いたもの。素材が面白く、経験されたことが含まれているのだから、リアリティはある。ただ、登場人物が、典型的すぎ、それぞれもつと良く表わされれば、小説の深みが出たのではないかと物言「たなか」というところで終わるは残念。

「掌」 「たなか」 第1号、第2号

塊のメンバーである、河村満が主宰する「掌小説」を書く会」から出されている実作集である。まだ、初心者と呼べる人々の掌小説が並び、初々しい感じがする。現時点では経験を土台にしたもののほうが良い気がするが、今後に期待したい。(作家集団「塊」 大高雅博)

●「季刊午前」34号

この号には「企画小説」として「川向この、こちら側」という複数の作者による合成執筆の小説作品が載っている。この試みは大胆で、おもしろい。小説作品がなぜ単数の作者によって書かれねばならないのか、そのアンチテーゼとも言える作り方は、実に斬新である。部分の作品をつなぐ詩も優れている。並々ならぬ優れた手腕の企画者、編集者がいないと、このような小説は形を成さない。まったく新しい形態の小説方法で、これからは何かおもしろいもの生まれてくる可能性がある。このように、ある地域、ある空間を、複数の書き手によってそれぞれに構成し、空間の意味を文学として問いつめていく、あるいは浮かび上がらせるという方法は、これまでであるようでなかなかなかったように思う。21世紀の新しい方法と言えるかもしれない。いずれにしても、企画者、編集者の手腕はきわめて高度な力量が要求される。このような企画小説を提案し、まとめたディレクターにはいまだとてみたいものである。「季刊午前」はもともとひじょうにセンスがよい同人雑誌なので、現代の人間のある形や声を反映させる表現力には、期待できるものがある。注視したい。

●「文芸中部」72号

沼田景子氏の「淨月庵」は、一つのトーンが文体の刻印を深めていて、よい雰囲気を感じ出している。愛の形を問う旋律がたしかに流れている。ただ、最後の別れが、やや流れてしまっていて、肝心なところで腰くだけになってしまった。重要な最後は、もっと腰を落として、その愛と別れの意味を深く追究すべきだろう。恋愛は、男女に取って別れてしまえばまったく意味も価値もないものになってしまうのだろうか。文学はむしろそこに光を当て、意味を見いだす行為ではないのか。その部分ができれば、もっと文体全体に磨きがかかり、秀作になっただろうと、惜しまれる。才能を感じる人なので、がんばってもらいたい。

寄贈誌御礼

- 同人誌の御寄贈をいただき、まことにありがとうございます。ございました。心から御礼申し上げます。
- 「じゅん文学」47号・48号
- 「八代地人」14号・15号・16号・17号
- 「弦」78号
- 「文芸中部」70号・71号・72号
- 「日通文学」689号・690号・691号・692号
- 「新現実」86号
- 「ベルク」100号
- 「北斗」521号・525号・523号・524号・525号・526号・527号・528号・529号
- 「掌(たなごころ)」1号、2号、3号
- 「相模文芸」12号
- 「文学街」220号・221号・222号・223号・224号
- 「現実と文学」42号
- 「季刊午前」34号
- 「時空」26号
- 「ちば文学」創刊号
- 「コスモス文学」316号・320号
- 「無尽花」23号・24号
- 「京浜文学」8号
- 「全作家」63号



文芸短信

●「文芸思潮」会員の柏木節子さんの小説作品「蜚の行方」が、北海道「苫小牧民報」主催の第15回「とまみん文学賞」で佳作に選ばれた。

選評で伊藤治男氏は「柏木節子さんの『蜚の行方』は、蜚を軸として主人公万里と桐山との再会を桐山の息子の祐一を介在させて、熟年時代の恋という微妙な心理状態を描ききっている。三つの時代設定を巧みに使い、それぞれの心理が時間の経過と共に変化する設定はさすがである。文章はこなれていて美しく、終わりの箇所での桐山の認知症にかかっているという暗示の取戻も作品に余韻を与えている。文学賞を逃したものの、作品の完成度は高い」と評価している。

「蜚の行方」は七月十五日から八月十二日毎週土曜日に五回に分けて苫小牧民報に連載される。北海道の方にはぜひ読んでいただきたい。

●「文芸思潮」会員の龍達男さんが第四十九回農民文学賞発表号の「季刊農民文学」にエッセイを発表している。「いのちのとも補償」と題するエッセイだ。龍さんの主張は本質をついている。「食べ物を生み出す農は、われわれが考えていることよりも、もっと深い存在で、人間を含めた生き物のいのちそのものといえるのではないだろうか。従って、農家や消費者の利害得失を超えて、生き物として支え合う「いのちのとも補償」を制度化しなければならぬ時期にきているのではないか」

龍さんの論は具体策にも富んでいる。けつして空論ではない、具体的展開を孕んでいる。こういう意見を生かす政治が現在の日本には切実に望まれている。展望の大きな優れたエッセイだ。

龍さんは光文社の「父のことば」エッセイにも五百数十編のなかからの三十三編に選ばれた(宮本輝選)。

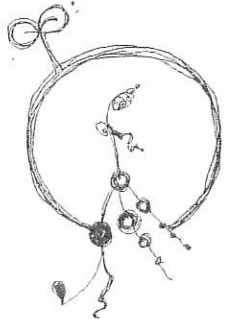
性は、過去をおろそかにする態度に起因している。

●「日通文学」694号

「編集室だより」の豊田一郎氏の言葉がいい。今期の芥川賞受賞の女性作家への批評。「受賞後のテレビインタビューで、受賞者が語った言葉が気になった。この小説を読んで職場に行こうという気を起こしてくれたらいいというような発言を聞いて。小説とはそんなものだろうか。……それだけではいけないものが小説であり、文学に求められている本質が何処かへ行ってしまうのには、唖然とさせられた。……我々は文学に何を求めているのがあるか。日常の癒しであってもいい。娯楽であつてもいい。しかし、それだけではないものを我々は文学に、小説に意味合いたい。……させて、芥川賞なら、その辺りを明確にして、受賞作家を選んで欲しい」

こういう鋭い批判をもっともつと打ち出していくべきだと思ふ。虚偽性を打ち破るのは、こうした生きた感想であり、批評である。マスコミが主導する多数性の虚偽を見極めていく姿勢が、真の文学創造につながっていくと思ふ。

(作家集団「塊」/五十嵐勉)



12号

「寡黙な背中」という題のこの生活エッセイは、先のエッセイとはまたひと味が違って、漁師の父親の姿が鮮やかに浮かんでくる秀作だ。この六月光文社文庫から文庫新刊として「父のことば」はあらためて出版された。充実したエッセイ集で、手軽に求められるので、ぜひ読んでもらいたい。

●第一回銀華文学賞において、「幻の季節」で第一回銀華文学賞奨励賞、「命の宴」で第二回銀華文学賞優秀賞を受賞した清末吾郎さんが小説集「夏の鶯」を出版された。この中にはもちろん「幻の季節」「命の宴」も収録されている。哀感に満ちた人生の底流を流れる慈愛と夢は、回帰に似た憧憬のあたたかみで読者の胸を包んでくる。地味だが、一つのぬくもりのある世界を構築した好短編集だ。

作品公募

第17回「北九州市自分史文学賞」

主催/北九州市  
後援/株式会社学習研究社  
賞Ⅱ大賞1名(賞金二〇〇万円) 佳作2名(賞金各五〇万円) 特別賞1名(賞金三〇万円)  
大賞には、学習研究社による単行本発刊予定  
審査委員Ⅱ三浦朱門、岩橋邦枝、佐木隆三各氏。  
応募期間Ⅱ平成18年7月1日から9月30日まで(当日消印有効)  
入選発表・表彰式Ⅱ平成19年1月下旬発表・2月東京で表彰式。  
募集要項の詳細などのお問い合わせは左記へ。

〒803-8501北九州市小倉北区城内1-1  
北九州市経済文化局文化振興課内「自分史文学賞」係  
電話093358222391  
FAX093358222677

●「弦」79号

山田實「再起の道」は、夫婦で別れた傷を持つ男女の再出発を軸とする話だが、低く流れるトーンがいい。落ち着いた感触の秋の色のような色調は、影を帯びて陰影を深めている。暴力を振るわれて、顔に痣を作った女がそのまま逃げ込んで、しばらく、まもなくどこかそのまもなく書き出しもいらない。この作品では、携帯電話のメールや、ナビゲーターがいろいろな役割を演じている。新しい小道具を使いながら、流れている男女の色彩の流れは淡く、古風である。そのバランスがまた一つの味を出している。終わり方はやや物足りないが、男女の足下に覗くある危うさは、よく出ている。これはこのまま終わる作品ではなく、さらに続く一連の作品と見るべきだろう。文章の流れは一つの悲愁が流れていて、力量を感じて、いい連作になる気配がある。

●「無花果」24号

田島朝美の「逢魔ヶ辻」は時空を超えたような出逢いと別れがおもしろい。突然現れた画家が、突然また時空の彼方へ去ってしまった。記憶喪失を交えたその生き方を宿命づけられた画家の存在もユニークで、絵を含めて彼が生きている空間が、現実の一つのねじれを象徴していて、超空間の存在を印象づける。この世界には確かにそういうものがあるものであり、時空のねじれの接点のようなものを一貫して追っているように見える筆者の足場には、強固なものを感じる。結末は、もう少し主題との関連を深めて、味よく終わらたかった。またタイトルは月並みで、もう一工夫ほしい。

●「あかいはな」3号

「巻頭言(品川章一)の厳島神社で見た夢幻能に」平倒せんばかりの衝撃を受けた」は含蓄がある。「それにしても私たちは、かつてのあの美しい日本語の表現力からなんと遠く離れてしまったのだろうか。これは日本民族の基底を問われることであるにちがいない」は共感した。

寄贈誌・本御札

同人誌・本の御贈物をいただき、まことにありがとうございます。心から御礼申し上げます

- 「じゅん文学」49号
●「八代地人」19号・20号・21号
●「弦」79号
●詩とエッセイ「葦笛」21号・文芸サイト
●「あかいはな」3号・紅花
●「小説家」22号・小説家社
●「半身」37号・半身の会
●「えん21」2号・えん21
●「宇宙詩人」5号・宇宙詩人社
●「極光」6号・極光の会
●「日通文学」695号・698号・697号・698号・699号・700号
●「ベルク」102号
●「北斗」530号・531号
●「文学街」225号
●「季刊午前」35号
●「無花果」24号
●九州文学」517号九州文学社

- 本
●詩集「ドン・アルバトロ暖味模倣物語」上屋純一(宇宙詩人叢書)
●「その夜の展開」発端は9」男澤一(二歩会出版部)
●「ぼくの弟 志郎」杉本利男(彩流社)
●「赤い絆」太田悠(友月書房)
●「孤愁」豊田一郎
●詩集「雪の陽炎」寒川靖子
●詩集「あわゆきの道」寒川靖子

安藤毅のエッセイ「女、女」も、田ソ連時代のレニングラードの体験を通してロシア女性を描いているが、小味のきいた好エッセイになっている。諷刺のにおいと絡んでいるところも、スリルを加味している。齋藤紅師の「日本文化を支えた植物/べにはな1」は詳細な知識に裏付けられた一つの文化史で、奥が深い。この誌はエッセイに味のある作品が多い。

●「小説家」122号

「小説家」はなかなか充実している。力作が多い。山田直義「袋小路」は題材が特殊で、税務署との闘いである。こんな世界があるのかと、まったく知らなかった世界を見せてくれるの、小説の楽しみの一つである。筆者の体験に裏打ちされた文章のディテールには、経済という世界の魔物の一つを見せられる。力作でもある。同人雑誌は集まっているメンバーでそれなりカラーが出るものである。「小説家」には、企業や経済のディテールをおろそかにしない一つの社会基盤を大事にする姿勢が見える。このリアリティは大事にしてほしい。

●「半身」37号

「半身」は、常識の枠を超えた、きわめて前衛的な誌である。同人は三人だが、その表現への実験性と野心には、並々ならぬものがある。小池多米司「私が消えて」「私」が現れた」は、上下で一十枚を超える長編。観念詩でもあり、批評でもあり、モノローグでもあり、いろいろな要素が混じり合った挑戦的な意欲作。これをどう捉えるか、判断に苦しみとところである。しかし編集後記を読むと文明史の視点もあるようなので、全体としては自己批評を含めた批評小説というべきか。この作品にははつきり「小説」と銘打つてあるので、小説としての表現意図はあるようだが……。とにかくその挑戦の意思には佩服。こういうエネルギーも存在することに、あらためて表現の広さ、深さを感じた。

桜井薫「タブアカン日誌」はインドネシアの反原

が凝縮されていて、気持ちがいい。

●「日通文学」700号

「日通文学」は、700号を重ねたが、次号で休刊となる。700号と一口に言っても、六〇年である。ここまで重ねて来た同人雑誌は日本でも数えるほどだろう。半世紀以上の伝統の灯を消してしまうのは実に惜しいが、やむを得ない事情があるのだろう。今は心から拍手を送りたい。その伝統は必ずどこかに生かされ、その情熱を受け継いでくれる人がいるはずである。残した足跡の大きさに、深く敬意を表したい。

最後に、「八代地人」21号の山口碧氏の「提言」には、現在日本ばかりでなく、世界を覆いつつある一つの不気味な光景がよく捉えられているので、まさに「提言」としてここに紹介したい。

提言 八代市の将来

「ゴーストタウン化する八代市」山口 碧
本誌会員の那須美智子氏によれば現在八代市の人口の、25・2%が65才以上の高齢者でこんなのを超高齢社会と呼ぶのだそうです。
若者が居なくなった理由は単純だ。ここについては働く場所が無く、食べて行かないからである。老人(年金生活者)ばかりが増え、市民の購買力は落ち、中小企業は倒産し、商店街の人通りはまばらになった。筆者が住んでいる松江町界隈も周りは老人ばかりだ。この分ではあと十年もすれば無人の家が増えるにちがいない。

その空き家に住もうとする人はほとんどいないだろう。その結果、人口はどんどん減っていく。このままでは近い将来、八代市はいわゆるゴーストタウンになってしまう。
こんな、夢も希望もない中小都市が日本全国に増えている。
自然は荒れ放題。昔賑やかだった街の通りを歩いて

発運動に、日本の太陽光発電を代替しようとするNGOの運動に関わるストーリーで、こちらのほうが小説的と言えは小説的である。しかしこれには逆に「エッセイ」と銘打つてある。この作品の題材はおもしろい。ただ、ストーリーの展開がやや遅い。しつかり小説として意識し、テーマを掘り下げ、ドラマ性を加味しながら構成していけば、いい作品になると思われる。

尾関忠雄の名がここにも見える。「過去の記憶/記憶の過去」を書いているが、この筆者は多作で、「北斗」にも書いているし、「小説家」にも「宇宙詩人」にも書いています。同人雑誌の世界にはこういうふうにも多作で大活躍している人もいます。「えん21」の杉本利男という作家もそうである。こうした活躍は注目に値する。

●詩誌「極光」6号

今月は詩誌が何冊か送られてきたが、どれもレベルが高い。北海道の「極光」はひじょうに高いレベルの詩作品がそろっていて、いまま、なかなかこれだけの詩誌はないと感じた。詩論もしつかりしている。私は現在の日本の詩誌をあまり読んでいないが、これまで読んだなかでは「極光」がベスト1である。レイアウトもいい。詩をよく知っている人が作っている。いずれまた、ゆつくり触れてみたい。この同人の中から、今回第二回「文芸思潮」現代詩賞の当選者斎藤正義氏が出ていて、やはりそれだけの場があつて、仲間がいて、そこで互いの切磋琢磨を経て、出てくることを痛感した。

●「宇宙詩人」5号

「宇宙詩人」もいい詩誌である。ここにも、試作によって集ういいグループがある。「宇宙詩人」は詩の朗読会もやっている。活発な文学活動が誌面にも活気を帯びさせている。やはり第二回「文芸思潮」現代詩賞当選の佐山広平氏も、参加し、詩を発表している。東京の商業誌などには見られない、純粋な詩作の行爲院だけ。

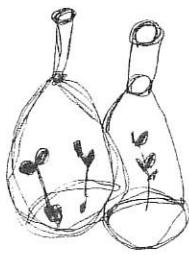
なぜこんなことになってしまったのか。
その最大の理由は人間の価値をカネと効率だけで量ろうとする考え方にあるのではなからうか。そんな冷たい考え方の社会では犯罪が多発するものむしろ当然だ。

月額二万円の国民年金で生活する老人たちも、ニートと呼ばれる無職の若者たちも、激増するアルバイト労働者も、理不尽なストライキに明日を無くした人々も、すべてはこのような非人間的社会的犠牲者ではないか。

郷土八代のゴーストタウン化も、根は同じだ。
一國の針路の舵取りをする政治家は自分たちの責任をよくよく考えてもらいたい。(八代地人「21号より」)

山口氏のこの文章は何よりも如実に日本の現在を物語っている。では、ここからどういう方向に、何をしたい方がいいのか、重要な出発点を与えてくれる。こういう視座を大事にすべきである。

(作家集団「塊」五十嵐勉)



●今期は「じゅん文学」の50号、「弦」の80号など記  
念号が揃った。同人雑誌を続けるのには大きなパワー  
がいる。中心になる人のパワーとそれを支える人のパ  
ワーと、その両輪が揃わないと持続できるものではな  
い。心から祝意を送りたい。

●「じゅん文学」50記念号(愛知県)  
「50号は記念号にしたいと全員参加を呼びかけたら  
三十余作の提出があった」という。ふつう同人雑誌は  
数編からせいぜい十編である。この作品数が「じゅん  
文学」の隆盛を表している。三八〇ページというポリ  
ュームには圧倒された。ここでは第九回目の「じゅん  
文学賞」も発表されている。伊藤仁美さんの「あいに  
くの雨」が受賞した。この同人雑誌の層の厚さがよく  
現れている。

あいかわらずの力作揃いだ、50号のなかでは千  
田よう子「影」がおもしろかった。出版の「生の不安」  
にある妄想が重なり、実在しない人間を実在するよう  
に思うその自己の複数性が、人間の内面の深い「影」  
を覗かせている。鋭利な二面もある。筆をじっくりと  
せてその不安をさらに深く覗いて、存在の根を見据え  
たら、さらにすこみのある作品になっただろう。

記念号の賑わいは、創作の沸騰を想わせる。この  
中からさらに実り多い果実が生れることを祈念した  
い。

●「弦」80号(愛知県)

こちらも二五人が執筆し、多彩な顔ぶれである。  
貴重な総目次を見ると、昭和四〇年に創刊で、四二年  
の歴史がある。「新樹」と「草」が合併して創刊され  
たこと、そのあとも「未開地」と合併したり、他の同  
人誌と交流したり、同人雑誌の存在のありようをその  
まま刻んでの八〇号は、味わい深いものがある。

山森恕美「決意」は、三七枚の力作で、裁判官の刺  
殺事件を家族の側から書いて、司法の立場に内的な血  
肉を与えている。迫力のある筆致は、一つの問題と世  
界を提示している。当事者あるいはその近くにいろ人

間でないし書けないリアリティがある。これは長編に  
もなりうる世界なので、今後の作品が期待される。

●「いかなこ」2号(兵庫県)  
簡単にすくろりだが、手づくりのあたたかい感触のあ  
る誌である。女性の執筆者が多いのも特徴か。個性の  
ある作品が揃っている。

なかでも宮崎眞弓「乙姫通り」はよくできた作品で、  
流れがよい文章は端正で、快い翳りがある。蟬の幼虫  
の上の七年からの羽化の変遷を、女性のこもりや  
不倫の閉塞空間にうまく重ねている。た、蟬のほう  
がイメージが強くなくなってしまっている。「乙姫通り」の印象  
が薄らってしまったのは一考したい。「乙姫通り」は  
これから続くはずの連作の全体のタイトルにして、こ  
の作品は蟬に関する言葉をタイトルにしたほうがいい  
かもしれない。文体も、じっくりしながらかみ備  
えている味に一つ一つの才能がある。しっかりと造形する力  
は十分ある。

●「照葉樹」2号(福岡県)

七〇ページのこの誌は書き手も二人で、二人がそ  
れぞれ二編ずつ書いている。こういうありようも同人  
誌の一つの形で、こんな贅沢もできるところが同人誌  
のおもしろさ、豊かさだといえよう。序に「言の穂を  
紡ぎて今宵の寝とせん」という言葉もい。

垂水薫「夏トカゲ」も題材が新鮮でさわやかな印  
象がある。「星垂る飛ぶ」にも感じられるように季節  
の風物に寛げる感性が豊かである。

水木伶「秋の匂い」もよく書けているが、「エスプ  
レソンが冷めたら」のほうが影が深くなっていて、  
小説空間のひろがりを感じる。主人公の生きる姿勢、  
両親、恋人、職場の後輩など、人物がよく描き分け  
られていて、それぞれが響き合っていて、主人公が生き方  
を模索する主旋律によく染みこみを盛り上げてい  
る。少女期を題材にした「秋の匂い」を一方で書き、  
また一方でこういう職場を交えた世界もしっかりと造形  
できる手腕は、卓越した技量を感じる。ただ「エス

プレソンが冷めたら」というタイトルは自分の造形す  
る世界を必要以上に軽く見せていて、ただけない。  
もつと適切なタイトル(5号)(福岡県)

●「胡蝶KOKO」5号(福岡県)  
この誌も最初はもつと少ない書き手でやっていった  
思うが、同人が増えている。

ニューフェイスらしい桑村勝士の「水を掻く水母」  
は漁業を管理する者の立場から題材を起こして、  
興味深い。現代の日本の漁業が直面している問題も見  
え、様々な角度から密漁の背後に横たわる漁業の姿が  
見え、興味深い。同人誌を読む楽しみは、こういう  
現代の日本の社会のディテールを熟知できることでも  
ある。こういう作品をどんどん書いていってほしい。

●「美郷文芸」3号(宮崎県)

この誌は二七人が執筆している賑やかな顔ぶれで、  
短文学、エッセイが多い。特集に「子供の広場」を編  
んでいる。子供の姿が生き生きと浮かぶのがいい。こ  
ういう、子供や地方行政と共存する同人誌のあり方  
も一つの存在様式だろう。おもしろい。中邑房夫遺  
跡の囲キリシヤを旅する」も、臨場感が溢れ、ギリシ  
ヤの空気がよく伝わってくる。段有輝子「慶事が一変  
した日」はチェルノブイリの原発事故を扱っていて、  
興味深い。よく調べているし、あるリアリティとも  
に、警鐘の音色よく伝わってくる。

●「京浜文学」9号(神奈川県)

九二歳の神谷量平氏が主宰している第四次の同人  
誌は健在。同じく九二歳という木村為蔵氏の異色のノ  
ンフィクション「西アフリカ16ヶ国市場開拓の記録」  
は、一九五〇年代に西アフリカへの商社の市場開拓の  
記録を綴ったもので、記録の価値は貴重である。経験  
した者でなければ書けない強いリアリティがある。戦  
前からの商社マンというだけでも価値がある。続編を  
期待したい。

栗原治人「モルフオ」は七〇年代学生運動の内ゲ

寄贈誌・本 御礼

同人誌・本の御寄贈をいただき、まことにありがと  
うございました。心から御礼申し上げます。

●誌

- 「京浜文学」9号 京浜文学会
- 「美郷文芸」3号 美郷文芸の会
- 「青い町」29号 北雪新書
- 「文芸中部」73号 文芸中部の会
- 「北平」32号 北平工房
- 「女界灘」8号 「女界灘」同人会
- 「照葉樹」2号 耀歌書房
- 「いかなこ」2号 明石文学
- 「弦」80号 弦の会
- 「じゅん文学」50号
- 「胡蝶・KOKO」5号 花書院
- 「いっば」7号 歩会
- 「文学街」226・227・228号 文学街社
- 「日通文学」70号 日通ベンクラブ
- 「相模文芸」13号 相模文芸クラブ
- 本
- 「詩人」田中浩二司/創英出版
- 詩集「目覚めねば」田中浩二司/柳生堂出版
- 創作集「黒い神」久間一秋/現実と文学の会
- 詩集「散乱する実在」佐山広平/近代文芸社
- 「T E X T 20」1 Vol. 1 佐山広平/表現者の会
- 「三叉路」杉本利男/金沢文学会
- 「波」小坂ケイ/日本文学館・ノベル倶楽部
- 詩集「風景」中川望/私家版
- 「草の生き方」中川謙人/私家版
- 「蜜の行方」粕木節子/麗書房
- 詩集「晦冥からのコスモス」栗山愛/私家版
- 童話集「飛べ、紙の鳥」西村被呂子/金澤文学文庫
- 「破れる風景」畦地里美/金澤文学文庫
- 「紅千鳥」桶目敏/驪馬出版
- 短編小説集「雪山桜」冬村勇陽/北雪新書

パを素材にした作品で、当時のことをよく振り返って  
いるが、事件の流れが、記録風になるもの、人物  
が動いていない。この学生運動の盛り上がりと衰退と、  
当時の権力の内ゲバへの仕掛けや、アメリカのベト  
ナム戦争との関連などをしっかりと描いていくには、長  
編小説にならざるを得ず、かなり腰をしっかりと入れた  
作業が必要だろう。また強固な姿勢も要求される。し  
かし本格的にこの時代の学生運動に取り組んだ小説に  
はまだお目にかからない。だからかしなければならな  
い仕事だとは思いますが、まだ成就されてはいない。ぜひ  
現れてほしいものである。

また、この長編小説にはもう一つの困難がある。  
それはテーマの意味である。突き詰めれば内ゲバは下  
ストエフスキーの「悪霊」の世界になってしまいが、  
それだけではない何かがあるはずである。多くの学生  
運動および歴史の抵抗運動は、すべて無駄だったのか、  
また社会主義国家が倒壊した現在の歴史の中で、それ  
とその理論に殉じた人々はずべて無意味だったのか、  
それに向かい合うだけの思考が小説の骨格を支えるこ  
とになる。それを発見し打ち建ててはきわめて困  
難な作業であるが、そこでしか死者は報われないであ  
らう。文学の巨人の登場が待たれるところである。

●「相模文芸」13号(神奈川県)

二四〇ページの堂々たるポリュームは、小説、詩、  
俳句、随筆、評論と多彩であり、しかも時代小説や時  
代考証のようなものもあればアラハを舞台にした小  
説、病院めや映画紹介などもあって、いろいろな角  
度から楽しめる。こういう豊かさも同人誌のおもしろ  
さの一つだろう。

このなかで特に注目したのは佐藤光代「処理」と  
外狩雅巳「父の死」である。「処理」はただ陶器の製  
作教室を止めるだけの話だが、ものの捉え方にユニ  
クな視点があり、一つの文章の密度が高く、トーンが  
ある。文章に緊張感がある。本格的に小説に取り組め  
ばかなりいいものが書けそうだ。テーマをどう発見し

小説の書き方

作家を志す人々のために

五十嵐 勉

個人の内部にある思いや認識のエネルギーを、どのよ  
うにして多くの人々が共感できる普遍的な姿形にするか  
という作業が「書く」ということです。  
「書く」という大きなエネルギーをお持ちの方々に、こ  
の本が少しでもお役に立てれば幸いです。(前書より)

素材の見つけ方・選び方/モチーフについて/テーマの  
捉え方/ストーリーの組み立て/構成/人物の設定/文  
章についてなど

自家版限定本 800円

ご注文・お問合せは直接文芸思潮までご連絡ください

16

16

16号

●「文学街」228号(東京都)

とにかく228号というのは凄いです。昔、鉄人28号というロボット漫画があったが、その前にさらに百が2つ付いた号数を発刊してきているのだ。表紙を開けると「今年もやります」と書いてあるのがさりげなく...

荒井登喜子「裸の女王」(全国同人雑誌・結社推薦作品「山音文学」)が巻頭から八割方を占めている。出だしは、どこか荒みほんやりした「私」の感覚で描かれていて。なぜだろう? 分かった。これは引きこもりになった若い女性の目から見た世界なのだ。そして父も母も頼みの妹も、この「私」姉の家庭内暴力に耐えかねて家を出てしまったのだ。「私」は、いじめがきつくて中学二年生頃から二十一歳になるまで、実家の米屋の二階でひっそりと生きてきた女性だったのだ。

やがてお金も底を突き、しかたなくアルバイトを探し始める。しかし見つからず窮して行く...公園に何日も居つづける中、声をかけてきた者がいた。それはレスビアンバーの主人、イツキだった。そのイツキも父親を自殺で亡くした過去があった。そんな人生の先輩に出会って息を吹き返す「私」。

しかし、その小社会「レスビアンバー」でも、やっつけのお客から軽い「いじめ」を受け、「私」はそこからさっさと逃避してしまおう。しかし、イツキの介入によって再び立ち直り、家族のありがたさを再認識し仕事に向って行く。ラストはこうだ。

「私は二つのグラスを、しっかりと手に持った。ひきつった笑顔を作り、またカウンターへ戻っていく。ストリーはけつこうストリートだ。レスビアンバー? それだけで奇を衒ったと思う読者もいるかもしれない。しかし感覚の新鮮さのみが求められ賞を与えられ商品化される...そんなレベルを超えたものがこの作品には感じられる。読む事によって実際に立ち直る読者が出てくるのではないか、そんな気にもさせる言...

物語。しかし大人同士が愛し合う中、主人公は死んだ父親への思慕から葛藤をもつ...:情感はあるのだが、ラストで母親を急逝させてしまうのは不自然。垂水薫の「夏トカゲ」は、なかなか読ませた。成績のいい中学生の千紗部は、やばい系の桃子に誘われる。桃子はトカゲを飼っていたのだ。家庭的な状況から就職を考える桃子と進学に向う千紗部のそれぞれが、トカゲという生き物へ思いを投影させる。トカゲが異様に出てきたり、それを殺したり...:の描写がなかなか読ませる。ただ、この二人がなぜそこまで「まなざし」を共有できたのか、その理由があまり伝わってこない。そこを描けたら、少女たちの心の繋がりがリアルイティをもつて開示できたかもしれない。

●「ベルク」山の文芸誌102(東京都)
まず表紙をめくと白黒の草原の写真がある。郷愁を感じさせる。山の紀行のしみじみとした文が続く。中でも萩生田浩の「春の背中」は、登山と人生が重ね合わされ臨場感を持って読めた。「こんなはずじゃなかった。かつては、私がほかの登山者を追い越して歩いてきたのだ...」からは、作者の思いがよく伝わってくる。人は仲間とともにありつつ、また個なのだということさをさりげなく伝えてくれる。小林理樹「京都へ」は、母を介護しつづける夫婦のつかの間の気分転換の様子が描かれていて伝わる。

最後のページに「体力にまかせてただ山に登るという行為から脱皮し、山岳文学という道を開こうとするものである」と述べられている志がいい。

●「宇宙詩人」No. 5(愛知県)
ヨーロッパ詩人協会ともつながりのある重厚な詩誌である。優れた詩が多い。村井一朗「二重奏」、佐山広平「川の蟹よ、沢蟹よ、孤独よ」に心の季節の情感を感じた。高井泉「狼む、みずしなさえこ」星になった理由には命の輝きの咆哮と哀しい願いを聴いた。そして鈴木孝「宇宙詩人」第5号「記・共存と自我と・5」のランボーの引用から始まる力強い詩への思...

葉の力をこの作品はもっている。出だしの引きこもりの感覚はみずみずしい。困って公園に居つづける自分の自意識もリアルだ。レスビアンバーの描写もよく伝わってくる。現実的には、そんないまうまく行かないよ、そんな人生の先輩に出会うことも偶然だかと思う読者もあるかもしれない。しかし、我々の人生そのものはすべて一回性の異なる状況との遭遇だ。そこにおいて、こんな出会いも大きな希望として感じられる。

現実には百万人はいると言われる引きこもり。その現代の大きな病理を一つのケースとして内側からみずみずしく描きながら、家族や他者との関係の有り難さを感じさせる。文学のもつ本来の力が、広く読まれるべき資質が、ここにはある。

●「文芸驢馬」52号(東京都)
これも地道に続けられてきた同人誌である。この同人誌の特徴は、評論家である編集・発行人が「編集者の視点から」と題して、巻末で掲載作品すべての批評をしている点である。その評がまことに当を得ていて、同人たちの成長と歩みを並行させているのだからと感ぜさせる。

●「新刊苑子の「灯り」」は、中越地震に題材をとった作品である。その意欲をまず買いたい。そして作者は会話、主人公の内的独白などを多用することによって臨場感を盛り上げていく。ただ状況説明に陥るのは避けるべきだが、明るさへの方向のみならず、天災によって生み出された人間の不条理性へのまなざしをどこか読みみい気もした。

●「村伊作「駅前」」は、知恵遅れのような同級生だった女性との再会により、当時の思い出を呼び覚ます小説である。一緒に時を過ごした過去を回想するには、それを共にした仲間が必要である。それが、初恋の人とは対極に近い女性であるということも、また意識のあり様として興味深い。ただラストでその女性を死んだことになってしまうのは、都合良すぎでは。

●「山梨文芸協会機関誌「イマジネーション」第3号(山梨県)
重厚でありかつハンディな機関誌だ。座談会あり、詩あり、旅行記あり、エッセイありの総合誌。エッセイに入っているが、福岡哲司の「非戦文学としての小説「笛吹川」」はみごとな分りやすい評論である。「橋山節考」を知っているという者の大方が、木下恵介あるいは今村昌平監督の映画で印象を語っているのと同様の事態を「笛吹川」においても避けたい」として、梗概を上げてある。「戦争は一度終了しても、また、(庶民を巻き込みながら次に継ぎして行く。笛吹川の流れるように押しとどめようともくなく、これを見抜く眼こそ七郎が生涯持ち続けたいたものである)」と鮮明だ。清水威「柿と武士道」は、柿の樹を象徴とした武士と庶民の間隙を描いていて分りやすく伝わった。一方、都築隆広「お化けがよくたちよるコンビ」で、フロースンダイキリを詠めながらチエスを指す中華服の男子たち「は、なんだか分りにくかった。しかもチエス、ここがそれほど伝わってこない、のだがなんと言うか、こういうところに偏執的に興味を持って描こうとする姿勢は、可能性が感じられる。

●「文学街」228号(東京都)

室生有紀「線路の先」は、数枚のエッセイである。しかし言葉に託す書き手の思いと読む側の投影の、交錯とギャップをさりげなく浮き彫りにさせている。

●「季刊「遠近」創刊10周年記念特集号(東京都)
多くの同人誌を育てられた故久保田正武氏のお弟子さんたちによって続けられた同人誌である。けつこう読み応えのある作品が載っている。中でも藤野秀樹の「忘れ去られた犬たち」は、おもしろかった。アイボと呼ばれた電化製品のロボット犬の話。命と電化製品の対比がうまく描かれ、哀愁を感じさせる作品である。

●「逆井三三「食の剣」」は一風変わった剣豪小説である。主人公柳生十兵衛の主君家光や父親との葛藤、そして妻たみとのやりとりなど、なかなか読ませる。ただ構成にやや難があるのと、剣豪は芸術家だと言いつつ作者の持論が少し独善的に感じられる。

●「無料雑誌「とりあえず」No. 1(東京都)
インターネットの掲示板のような言葉が並ぶ雑誌。ただ鈴木薫の「満月のソファ」は独特の味わいがある。折れることをしない妻と離婚した僕は、友人の女編集長と付き合う。しかし結局一線は超えない。それだけの不発小説なのだが雰囲気がある。「呑み明かした朝は、先ず握力から衰えるのだ」なんてけつこうリアルイティが感じられる。

●「照葉樹」2号(福岡県)
二人の書き手の同人誌。水木伶「秋の匂い」は父を亡くした主人公の女子と母のいない男子の淡い交情の...

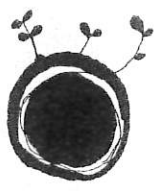
●「季刊午前」36号
●「北斗」535号・536号・537号
●「文芸東北」478号・489号・491号・492号
●「相模文芸」14号
●「照葉樹」3号
●「文学街」231号・233号・234号・235号・236号
●「イマジネーション」4号
●「ちば文芸」2号
●「雨彦」16号
●「樹林」508号
●「名古屋文学」24号
●「八代地人」22号・23号・24号・26号
●「極光」7号
●「京浜文学」8号
●「空とぶ鯨」7号
●「宇宙詩人」6号
●「じゅん文学」51号
●「不綱」32号
●「孤愁」1号

●「少年の海」光栄堯夫(五月書房)
●「大戦と戦後」平山浩樹(柏樹書院)
●「みづはなれどふねはしる」向井豊昭・麻田圭子(BABARA 書房)
●「海の色」麻田圭子
●「ビートルズの少年時代」クリシュナ・バルデオ・ヴァイド、長崎広子訳(財団法人大同生命国際文化基金)

●「ボプラ並木は涙色」男澤一(一歩会出版部)
●「幻の女」渡正和(三一書房)
●「尾関忠雄文学全集」二巻、「巻(風媒社)
●「詩集「雪の陽炎」寒川靖子(喜怒哀楽書房)
●「詩集「あわゆきの道」寒川靖子(喜怒哀楽書房)
●「ジギ谷」名村相実(自家出版)

寄贈誌・本御礼

- 「本曜日」23号
●「週刊ヨシノリ」3号
●「全作家」65号・66号
●「冥王星」9号
●「海」73号・74号・75号
●「槐」25号
●「海映派」109号
●「婦人文芸」83号



●「季刊午前」36号
●「北斗」535号・536号・537号
●「文芸東北」478号・489号・491号・492号
●「相模文芸」14号
●「照葉樹」3号
●「文学街」231号・233号・234号・235号・236号
●「イマジネーション」4号
●「ちば文芸」2号
●「雨彦」16号
●「樹林」508号
●「名古屋文学」24号
●「八代地人」22号・23号・24号・26号
●「極光」7号
●「京浜文学」8号
●「空とぶ鯨」7号
●「宇宙詩人」6号
●「じゅん文学」51号
●「不綱」32号
●「孤愁」1号

- 「少年の海」光栄堯夫(五月書房)
●「大戦と戦後」平山浩樹(柏樹書院)
●「みづはなれどふねはしる」向井豊昭・麻田圭子(BABARA 書房)
●「海の色」麻田圭子
●「ビートルズの少年時代」クリシュナ・バルデオ・ヴァイド、長崎広子訳(財団法人大同生命国際文化基金)
●「ボプラ並木は涙色」男澤一(一歩会出版部)
●「幻の女」渡正和(三一書房)
●「尾関忠雄文学全集」二巻、「巻(風媒社)
●「詩集「雪の陽炎」寒川靖子(喜怒哀楽書房)
●「詩集「あわゆきの道」寒川靖子(喜怒哀楽書房)
●「ジギ谷」名村相実(自家出版)



●「相模文芸」14号(神奈川県)

今号も豊かなった。詩俳句・短歌・童謡・エッセイ・小説評論と、どの角度からも楽しめている。この幅の広さは同人個々の豊かさに裏打ちされているからで、集まっている人物の影の深さと容量の大きさが窺われる。またその求心力にきわめて大きな存在がなければ、この文芸空間は成立しないだろう。賞賛すべき文芸活動である。エッセイも面白い作品が揃っているが、「百」という名の犬(白銀律子)は、犬との愛情が鮮明に描かれていて、ついでに泣きをしてしまったほどの真情溢れる秀作になっている。

今日的な問題として「建設業の談合は無くならない」(牟田ゆうじ)は、談合の根本的な構造を歴史的な建設業の成立時にまで遡って説いている厚みは、注目すべきものがある。こうした文章は、新聞でも一般の雑誌でもお目にかからない貴重なものである。「春駒についで」(登芳久)も柔らかい、しかも強靱な思考がゆつたりとねり流れて一つの確かな世界を紡ぎ出している。深みを備えた随想である。

小説「両手にあがりごと」(本城確)は脱殻機を操作中に誤って両手が巻き込まれ、失ってスタートする人生を書いているが、短い文を投げちぎり、ぶつけ重ねていくような文体は、力がある。素朴な迫力が見えるこの文章が、何に由来させているのかわからないが、今日の小説の文章とはまったく逆の方向を向いているそこに、逆に新鮮さを感じる。技巧に背を向けた技巧がある。同人雑誌優秀作に推薦したい作品である。

●「文芸東北」492号(宮城県)
昨年第17回東北北海道文学賞奨励賞作品「白い夏」(古林邦和)は、ベトナムのポト・ビーブルとして日本に来た、日本人の妻となったものの、海の深くずたなったはずの兄を雑誌で発見し、ベトナムに戻って再会するストーリーである。再会できた兄は、記憶をなくして、妹と最後まで認識できないところに、こえに扼えられたモンゴルの時空であろう。細かく書き留められているが、詩以外にもっと感性の翼をひろげてもよかつたかもしれない。

エッセイ「記憶の水鏡・父へのレクイエム」(宮本一宏)は詩性豊かな文章で、父への鎮魂に自身の半生を重ねて陰影深い旋律を奏でている。旋律は美しいが、もっと展開させ、根に力を持たせて緊張させていることができそうなきが、根に「片手間」に留まってしまうところが惜しい。連載歴史随想「長崎・さんた丸や」(加茂宗人)は長編連載だが、イエズス会の日本への布教を中心に息長く筆を進めているその発掘の根気は賞賛に値する。当時の未発達な交通手段や文化手段の下で地球の裏側まで布教に来るその情熱は、異常なものがあるはずで、そのあたりまで、その領域を丹念に掘り起掘されていないのが気になるが、この領域を掘り起こし、執筆を持統している意志は尊い。いつか大きくまとまったものになることを心から期待している。

小説「じょうろ」(西田宣子)、「極楽荘ばなし」(天谷千香子)の両方に共通して感じるのは、文章の軽快なタッチに読みやすさやおもしろさを感じるが、流れが優先されて、肝心の何を掘り取るかが、欠けている。この網では、雑魚しかかからないだろう。市民生活の快速さの中に半分埋没しているお手軽さが文体の軽快さに繋がっているとすれば、とうてい大きな病巣は摘み出せない。問いが足りないと思う。

●「婦人文芸」50号(東京都)
創刊50周年記念号で、大河内昭爾氏をはじめ、名のある評論家から祝辞も載せている。五〇周年半世紀の足跡は尊い。心から祝意を送りたい。
「かげろ」(音森れん)は、やや知恵の遅れた主人公元治の生死を手堅い筆致で構築している。両親の遺産を目当てにたかる男女、また逆に愛を注ぐ女性など、脇役を善悪しつかり締めて、話を進める物語の構築力、展開力は豊かな技量を示している。息子の弁当を持って学校へ行く場面もよい。マグロ船に乗って海に死ぬ

の物語のテーマが横たわっている。ベトナムの生活の描写、ベトナム戦争中の状況など、日本にいてはとうてい書けないリアリティを備えていて、国を越えた家族の絆を求めたモチーフは残留孤児以来なかつた世界である。筆者は現在ベトナムのサイゴンに在住している。その生活の基盤があつて初めて書ける小説であろう。筆致もしっかりしていて、姿勢も強靱なものを感じる。よく周囲の話に耳を傾け、確実な聞き取りをしている。東南アジアを描き、かつまたベトナム戦争とその後を現地から描いた視野の広い世界はあまりお目にかからないだけに、その点でも評価される。ただ、この小説は、最も肝心な「何が兄を記憶喪失させたか」という文学としての問いかけに明確に答えていない。それは「何が兄をあえてポト・ビーブルとして命がけの海への脱出に向かわせたか」という問いへの答えと連動しているはずである。死の危険を冒さざるそれは何か。それに答えていない結果が、ポト・ビーブルとして海に消えていった無数の犠牲者の声と響き合わない欠落となつて、読後の感動に結晶していかない弱点となつている。題名の「白い夏」は、兄が歌っていた歌の題名であるが、その歌が全体のテーマにかぶさつてこない点もそこに繋がっている。それは日本人としてベトナム人の心の傷を描くことができるか、という民族の根と文学に関わる問題をも含みつつ、事実と文学の間の重要な作業の困難を提示している。

今後日本人が海外に移住することも多くなり、また外国人も日本に多数来住し、生活もいつそう世界化していく趨勢にある。日本とベトナム、中国と日本、中東と日本というふうにくクロスオーバーする世界が小説化されている。そのとき、文学の根はどこに存在するのか、そのありかをお問われることも必然であろう。そこに作家の新たな一つの仕事が存在することも胸に銘記しておかねばならない。

●「北斗」537号(愛知県)
評論「敗北してなおーカレルチャベックと私」(竹最愛の息子を追つて、海の波にさらわれて行くラストシーンは特に鮮やかで、筆者の筆力の豊かさを感じさせる。この主人公を描き切るのには、こうした人間存在への深い愛情があるからで、これに根ざしたしっかりと生み出している。その存在を浮かび上がらせる文体を、生み出している。地味ではあるが大事に扱ってほしい、人間の根を深くみつくり眼差しである。ただ、もっと腰を落としてじっくり筆を進めたら、さらに光を放つ場面がいくつもあつた。この内容でこの短さでは、あえて進行を速くしなければならなくなるのは必然である。肝心な部分駆けて通過されている根みがかや残るが、筆者の力量を感じさせる秀作である。

●「海峡派」109号(福岡県)
「花牌」(高崎綾子)は、父親に執着的にかわいがられた主人公の、老梅を燃やしながらの追憶を導入部にした短編であるが、文章のうまさ、筋の運び、シーンの鮮やかさ、エピソードの入れ方など、抜群の手腕である。これほど完成度の高い短編は、近頃の文芸誌でもお目にかからない。幼い頃父親に連れられて、麻雀荘で父親の膝の上で卓を囲む場面は秀逸で、煙草や男のおいしさがしみついてくるようだ。ラストもうまい。力のある人が世には埋もれているものである。感心した。

●「樹林」508号(大阪府)
「樹林」は大阪文学学校の機関誌である。しっかりと編纂構成は大阪文学学校の層の厚さをよく表している。ただ、全体に短いものが多く、多くの人が書き寄せるためか、力作が掲載しにくいように感じられた。
「家をのぼる」(若代明子)は文章の感性はみずみずしく、しかも緻密で、感覚の展開を書ける力を示しているが、舞台や材料が家族や家庭、せいぜい近所の人々に限られている人物世界の狭さがやや窮屈な気がする。文章の感性は非凡なものがあるが、小説的骨格ができれば、いっそうこの感性が生きてくると思う。骨格の構築に意を注いでほしい。

その点ではむしろ「雨曇り」(石村和彦)のほうが

中忍)は、柔軟な思考が縦横無尽に批評文章を駆け巡らせているのびのびした筆致で、評論のおもしろさや味わいに富んだ秀作である。時代や歴史の批評にもなつていると同時に、自然に現代の日本の出版界への批評も含んでいる所に妙味がある。洗練された批評精神と文体は注目すべきものがある。

●「海」75号(三重県)
一六四ページとボリュームもあり、全体にある程度の水準の作品が揃った安定感のある同人雑誌である。「君との間の理がたい距離」(小久保修)はタイトルも変わつていて、全体に軽いタッチの進行感が快い。チンドン屋、写真サークル、学校のトイレの水浸し事件など、手際よく並べて進めて行く手腕は説ませる力を備えているが、軽みに流されてしまい、あとに残らない。小説は読み終わつてあとに残る何か重要で、それを今後一考してほしい。

●「通り雨」(遠藤昭巳)は、妻を亡くして三回忌を迎える男の心の動きを軸にしているが、愛人とおぼしき桃子という女性も痛く死に願っている。その桃子に頼まれて以前の桃子の夫に会いに行ったり、亡妻の三回忌に新潟の妻の実家を訪れて再婚を勧められたり、揺れる陰影はそれとなく出ているが、核になる「死んだこと」と、「死に願っている」ことが、しっかり文学として切り結ばれていないために、ふわふわした文学風景になつてしまっている。文学的な匂いはあるが、文学はない。本来あるべき切実な問いがここでは装飾品になつてしまっている。地を掘ること、問いを掘り下げることも、もっと自分の内部に深く問いかけることをこの筆者には望みたい。

●「季刊午前」36号(福岡県)
センスのいい雑誌で、イラストも垢抜けしている。しかし今号は小説以外のものに力を感した。「旅行記」(モンゴルに行く)(吉良甚盛)は丁寧な紀行文で、短期間の旅行にもかかわらず、よくモンゴルの地を描いている。挿入される詩もよい。この感性がゆ

小説展開の豊かさを感じる。おもしろくない企業組織での日常生活よりも、パソコンのメールやホームページのバーチャル世界の方にのめりこみがちな主人公が、このままバーチャルの世界へ行ってしまうというのか、中国人はユニークでおもしろい。多かれ少なかれ根をなくして仮想世界に取り込まれていく現代の浮遊性をもつての味として提示している。しかし「雨曇り」という題は、一見味がよさそうだが、よく読むともう一つ焦点を結んでいない。もっと先鋭な、腰の入った切り口を更に期待したいところだが、この機関誌の性格が、そこまで徹底的に書くことを制約している気もある。そういう意味ではこの作品も、持ち寄りの気色がある。相手と切り結ぶ鋭気が乏しい。

●「千葉文学」2号(千葉県)
A4の大きさの同人誌は、めずらしい。ワープロで版下を作っているらしい手作り感があるが、これも一つの味になつている。

●「ホーンキー・トランク・トレインに乗って」(玉田晃平)は、やはり感覚がいい。前作の「戦場のナイフ」にも感じていたが、現代の都市の風景感覚を描写やテーマに生かしている才能は注目すべきものがある。ただ、それをテーマの骨格に組み入れていくには、骨格そのものの強度を高めていく必要がある。双子の姉妹がマスターを殺すその部分を安易にオチとしてだけ処理するのはなく、それがなぜか、しつかり問い、書き込んで、そこに一つの現代の穴を見ることができたら、成功していただろう。惜しい。安易に筆を揮わないじっくりした取り組みを期待したい。

俳句による詩は新しい試みもおもしろい。誌面がつきたので、こゝまでとするが、今回は優秀作や佳作が多く、豊作だった。優秀作は「両手にあがりごと」(本城確)、「白い夏」(古林邦和)、「かげろ」(音森れん)、「花牌」(高崎綾子)、あとこゝに取り上げたものは、それに準じる作品である。